

青稜

1 - A

平成二十六年 度

青 稜 中 学 校

国 語

注意

- 一、指示があるまで開けてはいけません。
- 二、問題にはいる前に、解答用紙に受験番号・氏名をはっきりと書き入れなさい。
試験が終わって答案を出す前にもう一度確かめなさい。
- 三、この問題用紙は十三ページあります。試験開始直後に確認しなさい。
- 四、声を出して読んではいけません。
- 五、答えはすべて解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。
- 六、記号で答えられるものはすべて記号で答えなさい。
- 七、**字数指定のある問題は、設問に指示がない限り、句読点・記号を字数に数えます。**
- 八、答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 九、試験が終わったら、先生の指示にしたがって解答用紙を出しなさい。

一 次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

雑木林に入つてすぐ、弘が洋二にいった。

「とちゅうで帰りたいなんていっちゃダメだぞ。泣いたりしちゃダメだぞ」

洋二は、兄の厳しい顔を見上げて、こつくりした。ちよつとでも心細いようすを見せようものなら、きつと置いていかれるにちがいない。

「やくそく破つたら、しょうちしないぞ」

弘は、追い討ちをかけるように宣言した。それから、そつと背後を見返った。

櫟の細い幹が目の前に幾重にも立ち群がっている。そのなかに、ようやく二人並んで歩けるほどの小径が通っている。透かし見ると、その先に公団住宅の建物が白つぽく光っている。雑木林の外には五月中旬の陽光が降りそそいでいるが、二人のいる小径は新緑の葉に覆われて、緑色の暗がりになっている。

「おい、……ころぶなよ。根っこが出てる」

弘は、歩き出しながらいった。小学三年生の兄から見ると、一年生になつたばかりの弟は、とても危なっかしく見える。

弘と洋二が、母親と公団住宅に引越してきたのは、三月の初めだった。空き部屋に応募して入居が決まった。比較的古い団地だが、武蔵野の名残をとどめた高台にあつて、自然の環境が母子を喜ばせた。

前に住んでいた家は同じ町の、高台の下にあるが、いまは人手に渡っている。——兄弟は母親からそう聞いている。

雑木林のなかは、思つたより奥が深かった。

団地の五階のベランダから見渡すと、林はほんのひとまたぎできるくらいに見え、その先に住宅地の屋根が列なっている。さらに、そのはるか彼方に町が広がっているのだ。

櫟の木立に樫や椎がまじっていて、その幹が行く手の小径を阻むように放射状に伸び分かれたり、横ばいになったりしている。もはや背後には木々の群れしか見えない。

「洋二。……あれ、ほんとにコロの声だったよな、ぜつたいだよな」

「うん、ぜつたい」

① 洋二は、兄の歩幅に合わせようと、できるだけ大股に歩きながら応えた。息が弾んでいる。頸筋からポロシャツの背中にかけて、じつとりと汗をかいている。

「ゆうべも、その前の晩も、聞こえたよな」

「うん、その前の前の晩も、聞こえた」

二人は、林の向こうに犬の声を探すふうに耳をそばだてた。しかし、聞こえたのは、遠くを走るバイクの音だけだった。

このところ兄弟は毎晩のように、遠い犬の声を聞いていた。激しく吠えるというのではなく、ほんの二、三声ずつ間を置いて、野太い声で威嚇するように吠えているのだ。——それは、きまつて夜の十時ごろ、雑木林の奥から聞こえてきた。

最初に聞いたのは、四日前だった。二人で九時頃までテレビを観たあと二段ベッドに入ったが、寝つかれないまま闇を見つめていたら、下段から洋二が弘に声をかけた。

父親がいたときはもちろん、いなくなつてから一年間も、母子はその家に住んでいた。小さな家だったが、庭があった。庭の隅には、犬小屋が置いてあった。

弘と洋二は、コロという名の犬を飼っていた。秋田犬の雌で、生後二年足らずだが、後ろ足で立ち上がると弘の背丈ぐらいいはあった。

めつたに吠えることはないが、夜中に怪しい物音がすると、雌犬にしては野太い声を上げて威嚇した。おかげで母子は、父親がいなくても安心して眠ることができた。

そのコロと、兄弟は二ヶ月あまり会っていない。団地に引越したとき、よそに預けてきたのである。団地では、犬を飼うことはできないからだつた。

「ねえ、ママ。……どこにコロを預けたの」

「コロに会いに行きたいよ。ねえ、ママったら」

弘と洋二は、毎日のようにせがんだ。しかし、母親はこう応えるばかりだった。

「コロに会つたら、別れるのが、また辛くなるでしょ。……会わないほうが、いいの。我慢をしていれば、そのうちきつと忘れることができるわ」

そういう母親の顔が、何かに耐えるようにゆがんでいるのを、弘は見ている。何となく、これ以上せがんではいけないと思う。それで弟の口も閉ざさせるのだが、翌日になると、ついまたせがんでしまうのだ。

——町に下りていけば、コロの居場所なんて、すぐ分かるんだけどな。

弘は、そう思っている。だが、小学校は団地のそばにあるので、なかなか町へ行く機会がない。そのうえ、特別の用事でもないかぎり子どもだけで町をうろつくのは、学校でも厳しく禁止されているのだ。

「お兄ちゃん、……コロが吠えてる」

まさにコロの声そつくりだった。弘は、思わず窓を開けて、コロオ、コロオ、と叫んだ。

林の向こうにコロがいる、と思ひ定めた。日曜日を待つて、母親に内緒で雑木林に入ってきたのは、そのためであった。

雑木林の小径は、まだまだ続いている。

十分ほど歩いて、少し疲れが出てきたところだった。洋二が、急にいいだした。

「お兄ちゃん、……足がかゆいね」

② 遠慮がちな小さな声だった。——弘も、さつきから半ズボンの裾際を掻いている。

「蚊だよ。……このくらい、がまんしろ」

「真つ黒だよ、お兄ちゃんの足……」

見ると、裸の足に黒い蚊の群れが斑になって食いついている。弘は、あわてて野球帽を脱いで、足をはたいた。痺れるような、かゆみが襲ってきた。狂つたように激しく足踏みをした。

「走ろう、お兄ちゃん」

「おまえ、さきに走れ。……ころぶなよ」

不思議なことに、顔や腕には蚊はとまらない。もつぱら足だけを狙ってくる。それに、蚊が集まるのは弘の方に多く、洋二にはそれほどでもない。

——いつだって、そうなんだ。

弘は、前を走って行く洋二の細い足を見ながら、そう思った。

——ひどい目にあうのは、いつだってぼくのほうなんだ。

弘は、ときどき弟が憎らしくなることがある。何も知らない弟の分まで、

不幸を背負わされていると思うことがある。

木立が密集している場所に來たとき、弘はそつと走る速度を落とした。洋二は気がつかずに、懸命に走っていく。

「ばあか、ひとりぼっちになつてみる」

弘はそうつぶやいて、小径から木立の中へ駆け込んだ。そのまま、こつそりと樫の根方にうずくまつた。

藪蚊が、頸筋を襲つてくる。手の甲にまで食いつこうとする。弘は、そつと追い払いながら、息をひそめていた。

しばらくして、小さな足音が近づいてきた。ひどく慌てた、乱れた足音だった。半泣きの喘ぎが高まつている。

「お兄ちゃん、…お兄ちゃん」

心細い声で低く呼んでいる。弘の予想したよりも激しい慌てぶりである。

「おい、洋二。…どうしたい」

弘は、にやにやしながら、立ち上がった。洋二は、涙をためた目で兄を見つめた。

「…あつちに、へんなやつらがいるの」

洋二が、いま來たほうを指さして告げた。あわてていたのは、そのせいらしかった。

③ 弘はがつかりして、口をとがらせた。

「へんなやつらつて、どんなやつらだい」

「お兄ちゃんより大きなやつらが、三人」

怯えた顔を、弘は睨みつけた。④ 強がつて見せたのだが、内心びくつくものがあつた。

「行こう。…どんなやつらがいたつて、へっちゃらさ。心配すんなよ。」

「そうか。スウスウして気持ちいいんで泣けてきたんだよな。さあ、もうだいじようぶだぜ」

⑤ 中学生たちからかわれながら、弘はむしように胸が熱くなつて、涙を落とし続けた。洋二が、心配そうに見上げていた。

「この道を行くとな、途中に細い道が分かれているから、そつちへ行くといいぜ。おれたちが作った新しい抜け道なんだ」

「はい。…ありがとうございます」

弘は、先生に向かつてするように、礼儀正しくお辞儀をした。洋二も真似て、最敬礼していた。

そのとき、中学生たちが探しているものが、弘にも分かつた。⑥ 地面に置かれた透明なビニール袋の中に、短い角を持ったカブトムシの蛹が五匹ほど見えた。

中学生たちに教わたたとおりの抜け道を行くと、間もなく林を出ることができた。

林の向こう側は、新興の住宅地であつた。広い庭とガレージ付きの瀟洒な家々が、きつちりした区画に分けられて建ち並んでいた。

弘と洋二は、コロを探しはじめた。林を越えて声が聞こえてきたのだから、きつと林に沿つたあたりにいる、と見当をつけていた。

「コロ、コロオ。…コロ、コロオ」

二人は、かつての調子で呼びながら歩いた。家々から、呼応するように犬の吠え声が上がつた。しかし、たいていは家の中からで、しかもスピッツのような甲高い声だつた。

「お兄ちゃん。…コロがいたよ」

中学生らしい少年たちが三人、小径のそばの木株の根もとにしゃがみこんでいた。土を掘つて、何かを探しているようすだつた。

「お前ら、どこに行くんだ」

一人が、大人のような太い声でいった。弘は、足をとめて、どもりながら応えた。

「あつちです。…林の向こう」

「そうか。でも、この道のまま行つたら、すぐに行き止まりだぜ。新しい家が建つんで、道がふさがれてんだよ」

あとの二人が、鋭い目で弘と洋二を見つめていた。

いちばん大柄な少年が、いきなり兄弟を手招きした。

「おい。ちよつと、ここに来てみな」

弘は逃げ出したいのをこらえ、洋二を背中に隠すようにして近づいた。膝が震えていた。

「すぐく蚊に食われてんじゃねえか。足じゅう真つ赤だぜ、…かわいそうに」

「おい。林に來るときは、こんなのを持つてこなきゃダメだよ。ほら、足を出してみな」

大柄な少年がポケットから取り出したのは、チューブ入りのかゆみ止めだつた。

白い薬を大量に手のひらに取つて、弘の足に塗りつけはじめた。冷たいような爽やかな感触が広がつて、かゆみが消えていった。

「なんだよ、おまえ、泣くなよ。…おれたち、いじめているわけじゃねえだろ。ばか」

洋二が目敏く見つけたのは、大きな鉄の扉のある家だつた。格子になつた門扉の向こうで、白い秋田犬が尾を振つていた。二ヶ月あまり会わないうちに、すっかり大きくなっているが、耳の立つた形も、丸めた尾の振り方も、目つきまで、コロそのものだつた。

二人は、門扉に駆け寄つた。コロは、ますます激しく尾を振つた。——洋二が格子のあいだから手を差し入れたとき、弘はどきりとした。とつさに洋二をとめようとしたのが何故なのか、そのときは自分にも分からなかつた。

コロは、ゆつくりと洋二の手元を嗅いでから、長い舌を出して舐めはじめた。

「コロ、さびしかつたろ。…ここにいたんだね。毎晩、ぼくたちを呼んでたんだね」

洋二が話しかけているあいだ、弘はコロの様子を見ていた。コロはたくましく、筋肉も張つていて、もうすっかり成犬だつた。

「洋二、行こう。…はやく」

弘が、いきなり洋二の肩を引っぱつた。洋二が尻もちをつきながら、門扉の中を見ると、玄関のドアが開くところだつた。

「どなたかしら、犬に近づくと危ないわよ」

声が出たときは、二人とも隣家の塀のところまで逃げていた。コロが、一声だけ、いつもの野太い声で短く吠えた。

「コロ、元気だつたね、お兄ちゃん」

雑木林に入つたとき、それまで黙りこくつていた洋二が、そつといった。

「ああ、元気だつたな」

弘は、短く応えただけだった。あとは思いに沈んだ顔で、口を一文字にしていた。

i 「また、会いに来ようね、…お兄ちゃん」

ii 「ああ、…また来ような」

応えながら、弘は学校で聞いた同級生の言葉を思い出していた。——それは弟にはけつて話せないことだった。

その同級生は、弘と同じように新学年から団地に引っ越してきたのだが、前の家で飼っていた犬について話していた。

「うちの犬はね、保健所に連れて行かれたんだ。…団地では飼えないし、誰も引き取り手がないんで、^{*}始末してもらったんだよ」

弘は〈始末〉という言葉がすぐには分からなかった。^⑦その意味を説明されるとき、弘は相手を殴りつけたいほど憎んだ。

いま、雑木林の小径をたどりながら、私はその〈始末〉という言葉^{はさう}を反芻している。

弟には決して話せないことが、もう一つあった。さっきのコロのことである。

——あれは、コロじゃなかった。

弘は、肩をすぼめてうつむいた。

——だって、あの犬にはオチンチンがあつたんだもの。

^⑧弘は、洋二と並んで、唇を固く結んだまま歩き続けた。

(内海隆一郎「林を抜けて」より)

※始末：保健所で動物を殺処分すること。

エ 弟が思いのほかすぐに戻ってきてしまったため、兄弟の絆^{きずな}を深めるだけの十分な時間が確保できなかったから。

問4 ④——「強がつて見せたのだが、内心びくつくものがあつた」とありますが、こうした「弘」の内面は、この後のどのような行動に現れていますか。本文中から連続した二文で探し、はじめの五字を書き抜きなさい。

問5 ⑤——「中学生たちにからかわれながら、弘はむしろ胸が熱くなって、涙を落とし続けた」とありますが、このときの「弘」の心境について説明したものとして最も適切なものを次から選びなさい。

ア 弟の目の前からかわれ、兄としての面子^{めんつ}を潰^{つぶ}された悔しさを抑えきれないでいる。

イ 愛犬も見つからないうえ恐ろしい目にまで遭^あい、無謀な計画を立てた自分を激しく責めている。

ウ 恐怖や緊張から解放されたことで、今まで抑^{おさ}えていたさまざまな感情が一気に噴出している。

エ 中学生たちの温かい愛情に触れ、彼らを恐れていた自分の思慮のなさを恥じている。

問6 ⑥——「地面に置かれたら蛹が五匹ほど見えた」という記述から読み取るべきこととして最も適切なものを、次から選びなさい。

ア「中学生」たちの行為は彼らが恐れるようなものではなかったというところが、「弘」が冷静さを取り戻すと同時に明らかになった。

イ 昆虫に執着する「中学生」の姿を目撃したことが、「コロ」の行方を追

問1 ①——「洋二は、くじつとりと汗をかいている」とありますが、「洋二」がこのように無理をするのはなぜですか。「洋二は」()と考えているから。」という形で説明する場合、()に入れるのにふさわしい一文を本文中から探し、はじめの五字を書き抜きなさい。

問2 ②——「遠慮がちな小さな声だった」とありますが、このときの「洋二」の説明として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 愛犬を見つけるためには多少の忍耐が必要だとは思いますが、足の痒みに耐えきれずに、兄に助けを求めている。

イ 消極的な発言をして兄の機嫌を損^そねることを心配しながらも、兄の足に群がる蚊の存在を遠回しに示そうとしている。

ウ 足のかゆみについて言うことで、愛犬を見つけることはできないのではないかと不安を一時的に忘れようとしている。

エ 不用意な発言は兄を批判することにつながるので、言葉を選びながら無謀な計画を立てがちな兄をたしなめようとしている。

問3 ③——「弘はがっかりして、口をとがらせた」とありますが、なぜですか。その説明として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 弟が兄を見失った不安で泣いているわけではないため、兄の大切さを痛感させるきっかけにはならなかったから。

イ 常に兄の意のままに振る舞う弟も、今回ばかりは自分の思惑通りに動かなかつたから。

ウ 中学生が登場することで、兄としての威厳^{いげん}が損なわれるのではないかと心配したから。

う自分たちの姿を客観的に見つめるきっかけとなった。

ウ「コロ」の行方を探している「弘」たちにとっては、カブトムシの蛹が捕えられている光景は不吉なものとして映った。

エ 昆虫とはいえ生命を粗末にする「中学生」は、「弘」たちの直感通り、恐れるべき冷酷な存在であることが判明した。

問7 b~~~~「何となくいいなと思う」、c~~~~「とつさに洋二をく分かんなかった」とありますが、このような描写が物語ることとして最も適切なものを次から選びなさい。

ア 感情的になりながらも、冷静さを保ち続けることで、事態が悪化するのを防いでいる。

イ 常に落ち着いて状況を分析し、どのような行動を取るべきかを的確に判断している。

ウ 子どもながらに大人の感情を推し量り、弟や母を傷つけないように行動を選んでいく。

エ 子ども特有の直感によって、苛酷^{かこく}な真実を知ってしまうことを無意識的に避^さけている。

〈問題は次のページに続きます〉

問8 ⑦——「その意味を説明されたとき『憎んだ』とありますが、なぜですか。その説明として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 〈始末〉という言葉の意味が犬の命を奪うことだと知り、人間の身勝手さに驚き、憤りを感じているから。

イ 愛犬の行方が分からなくなっている自分の前で、犬の命を奪った話をする相手の気配りのなさに呆れているから。

ウ 動物の命を物同様に軽々しく捉えている相手と、その犬の命が奪われた現実に対し、やり場のない怒りを覚えているから。

エ 無責任に犬を飼ったことが、尊い命を奪うことにつながったのだと、相手とその家族に激しい怒りを感じているから。

問9 ⑧——「弘は、洋二と並んで、唇を固く結んだまま歩き続けた」とありますが、並んで歩いている「弘」と「洋二」は、それぞれ違う心境にあると考えられます。両者の「口」についての考えを、i・ii……の発言を踏まえて、それぞれ二十字前後で答えなさい。

問10 a~~~~「櫟の細い幹が、緑色の暗がりになっている」とありますが、この情景描写の説明として最も適切なものを次から選びなさい。

ア 兄弟二人が並んで歩まなければならない状況にいらがらも、互にいがみ合わざるを得ない二人の運命を暗示している。

イ 先の見えない行き詰まった状況の中、将来への見通しも立たずに途方に暮れている兄弟の姿を印象的に表現している。

ウ 自分たちの信じた道を歩み続けたことで、かすかに希望が見え始めたことを象徴的に示している。

二 次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

《I文》

「自然満足度」という概念がある。グラフを見てみよう。縦軸は生活の満足度で、通常それは生活の物質的豊かさ（いわゆる生活水準）をあらわす。横軸は自然の利用度。

0は原始時代で、人間は狩猟や採集などをしながら、その日の食料を採すのに懸命になっていた。人類はやがて農業を営むようになり、自然の利用が進んでA点に達した。それまでは、人間と自然は共存共栄の関係にあり、曲線はゆるやかに上昇していった。A点は産業革命の始まりで、それ以降、^①技術の急速な進歩により一気に最高点（B点）まで駆け上がった。B点は高度経済成長時代で、自然破壊と引きかえに、物質的満足度の増大というそれまでの状況に陰りが見えてきた。

B点に到達するまでのあいだ、人類は、自然をどんどん切り開き、資源を利用することによって生活水準を向上させ、（物質的な）満足度を高めてきた。それは、科学技術全盛時代で、まさしく大量に作って大量に捨てるという時代。人々は、資源は無限にある、地球はいつまでも傷つくはずはない、という前提で産業活動に邁進した。

だが、このような地球無限時代がいつまでも続くはずがない。公害や戦争によって地球が傷つき、多くの人々は苦しめられた。そしてその修復のためにいまでもなお多くの人力・資金の消費を余儀なくされている。^②このような堂々めぐりのなかで、私たちはB点を通り越して下降曲線をたどりつつ、いまC点あたりまで来ている。

C点では、資源利用が、地球規模での環境破壊・汚染、資源の枯渇など

エ 新たな生活がすでに幕を開けているものの、それは兄弟にとっては受け入れがたい現実でしかないことを意味している。

問11 ——「そういう母親の顔が、何かに耐えるようにゆがんでいる」とありますが、⑧——の「弘」なら、母のこの表情の理由をどのように考えると思われますか。簡潔に説明しなさい。

問12 本文の内容について述べたものとして適切なものを次から二つ選びなさい。

ア 三人称によって語られながらも、物語は「弘」の内面に寄り添って展開している。

イ 断片的な過去の回想を差し挟むことによって、少年たちの内面の混乱が巧みに再現されている。

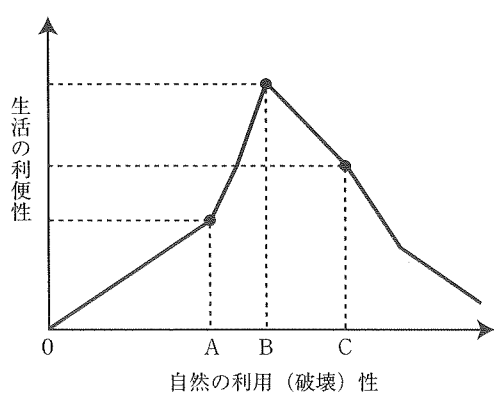
ウ 兄弟の軽妙なやりとりが、短い会話文の連続という方法によってユーモラスに描かれている。

エ 満たされない現実の世界とわずかな希望の託された世界とが、林によって隔てられるような空間構成がとられている。

オ 様々な登場人物の内面が詳細に描写されながら、物語が重層的に構成されている。

を引き起こし、満足度は大きく損なわれつつある。自然は適切に利用すれば、わたしたちの生活を支え、癒しをあたえてくれるが、いまでは、過度の自然利用がもたらすマイナスの影響、満足度の低下が目立ちはじめた。

^③人類がこのままの状況が続けることは、C点から右に転げ落ちていくことになる。それは、自然破壊をさらに進め、それと引きかえに、人間を含む生態系の生存を危機に陥れる。C点から右に進むことは許されない。



《II文》

「共有地の悲劇」と呼ばれる、示唆に富んだ理論がある。

ここに、誰もが自由に放牧してよい共有の牧草地があったとしよう。市場経済では、経済的な利益を追求する自由が与えられているから、放牧する人は、最大の利益が得られるように牛の頭数を調整することになる。

この牧草地に、新たに一頭の牛を加えたとする。彼は、確実に一頭分の利益の増加を得ることができるが、他方、牧草地に対する負担は、多数の牛がもたらす（草が減るといふ）負担に比べれば無視できるほどのものであ

る。そこで彼（および他の放牧者）は、「もう一頭加えれば有利になる」と判断する。こうして、すべての放牧者は、利益を期待しながら、際限なく牛を増加させてゆく。

このような行為は、牛全体の頭数が十分少ないうちは問題ないが、ある限界を超えると牧草の消費が回復を上回る。そうなると牧草地は荒廃し、放牧者全員がすべての牛を失うという悲劇に見舞われることになる。

この話は極端な例だ、と軽視してはならない。人類は、過去において、そのような悲劇をいくつも体験しているからだ。

チリ海岸の西方、三八〇〇キロメートルの南太平洋上に、^④ イースター島とよぶ孤島がある。面積は佐渡島の約五分の一だが、約一〇〇〇体ほどの巨石像モアイがあり、世界遺産（ラパ・ヌイ国立公園）に登録されている。

現在この島は、木もほとんど生えない広漠たる草原であるが、五世紀のころは豊かな森に覆われていて、島民は森の木で大きな船を造り、クジラを捕ったりしていた。その後、人口は増えつづけ、一六〇〇年頃には、生態系を維持できる人口を超えてしまった（七〇〇〇〜一万人と推定される）。そうなると、暖房用の薪、家屋や船の建築に多くの木が必要になり、森は急激に減少した[※]。また、深刻な食糧難に見舞われ、食料をめぐって部族間抗争が頻発するようになった。

イースター島民にとって悲劇であったのは、島がもはやすべての島民を養うことができないと気がついたとき、すでに島には利用できる木が枯渇していたことだ。それはまさしく「共有地の悲劇」そのものであった。

わたしたちはいま、「共有地の悲劇」に向かって歩み続けてはいないだろうか。^⑤ 地球全体が第二のイースター島になることはないだろうか。

しかし、いまわたしたちは、イースター島が「共有地の悲劇」を避けられ

なかった時代に比べれば、格段に進歩した自然科学の知識を手に行っている。地球環境についても、多くの科学的な予測が可能になった。「気がついたときにはもう遅い」というイースター島の悲劇を繰り返さないためにも、科学の力に耳を傾け、地球は今どこへ向かって進んでいるかを考える必要がある。

ただし、自然の基本法則を追求する自然科学——それは利害とは無関係である——と、それを利用することによって成り立つ科学技術とは、区別されなければならないことを指摘しておきたい。自然科学によって明らかにされた基本法則は科学技術を通して地球全体や人間社会にとって、プラスにもマイナスにも利用されるからだ。このことは、たとえば、福祉につながる交通・通信・医療などと、不幸をもたらす戦争が、すべて^⑥ X を基礎として展開されてきたことを考えればよくわかる。

科学技術は、部分的システム（交通・通信・医療など）には強力な手段を開発してきたが、地球環境のような全体的システムにも同様の効果を発揮するという過度の期待は禁物だ。科学技術には、できることとできないことと、やっつてよいことといけないことが、同居している。そしてその判断は、最終的に市民の手にゆだねられるのだ。

（広瀬立成「物理学者、ゴミと闘う」より）

※巨石像モアイ建築の道具としても多くの木を使用した歴史がある。

問1 ①——「技術の急速な進歩により、駆け上がってしまった」とありますが、「進歩」に対して「駆け上がってしまった」と表現するのはなぜですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 急速に便利な生活を手に入れたことと表裏一体の問題点があることを示唆するため。

イ 技術の進歩が予想以上の速さで成されていることに対する誇らしさを、皮肉的に表現することで強調するため。

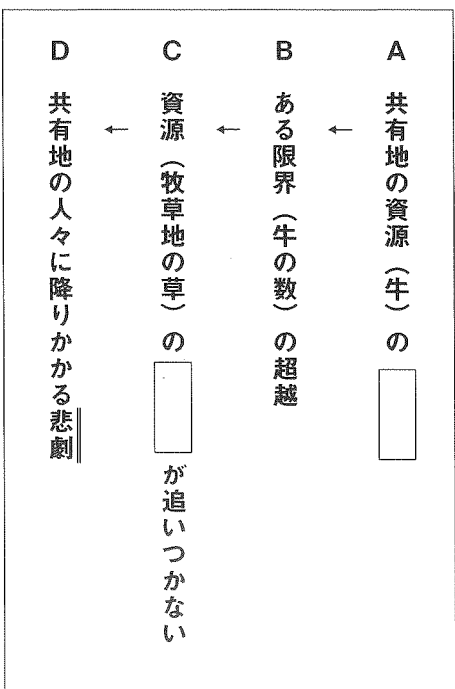
ウ 技術ばかりが進歩して、人間の精神がそこについていけないことを批判するため。

エ 人々の生活はすっかり一変してしまっただが、かつての農村の生活に対する懐古の気持ちを示すため。

問2 ②——「このような堂々めぐりのなかで、いまC点あたりまで来ている」とありますが、ここでの「堂々めぐり（＝同じようなことが何度もくり返され進行しないこと）」とは人間がどのようなことをくり返している状態をいうのですか。「環境」「自分たち」という語を使って四十字以内で説明しなさい。

問3 ③——「人類がこのままの状況が続ける」とありますが、「このままの状況」とは人間がどのようなことをしている状況を指すのですか。《Ⅰ文》の中から七字で書き抜きなさい。

問5 ④——「イースター島とよぶ孤島」とありますが、この島の例を前問の「共有地の悲劇」になぞらえた場合、「牛」と「牧草」にあたるものはそれぞれ何ですか。それぞれ漢字一字で答えなさい。



(2) この理論において「悲劇」とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から選びなさい。

ア 牛が繁殖し、際限なく増えていつてしまうこと。

イ 牛が共有地の草を予想以上に大量に消費すること。

ウ 牛を増やし続け、放牧者が管理しきれなくなること。

エ 餌が不足し、牛が生きる環境が損なわれること。

問6 ⑤——「地球全体が第二のイースター島になる」について答えなさい。

(1) この警告は、人間の身勝手な行動がどのような状態を招くことを指し示しているのですか。その答えとなる部分を《Ⅰ文》の中から「〜こと」に続く形で二十字以内で書き抜きなさい。

(2) 「イースター島」の歴史とは対照的に、筆者が考える本来あるべき人間と自然の関係を、最も簡潔に表した四字の語を、《Ⅰ文》の中から書き抜きなさい。

問7 X にあてはまる語を文中から五字以内で書き抜きなさい。

問8 ⑥——「科学技術には、できることとできないこと、やってよいことといけないことが、同居している」とありますが、この内容を説明したものととして最もふさわしいものを次から選びなさい。

ア 科学技術は人間の文明を今日のような高等なものにするために不可欠であったが、まだまだ現在の技術ではできないことが多くあり、さらなる発展の余地があるということ。

イ 人間は自然環境の前には完全に非力な存在であり、偉大なる科学技術の力によって不可能など存在しない世の中にしていくことがこれらの課題だということ。

ウ 人間が豊かな生活を求め発展させてきた科学技術は、便利な生活を生み出す反面、非人間的なものや、悪い結果をもたらす負の側面も持っているということ。

エ 科学技術の力は地球上の生物の能力を超えており、人間が適切に制

御しながら使用しなければ生物が生存していく上で非常に危険であるということ。

問9 次の各文について、筆者の意見として正しいものにはaを、そうでないものにはbを答えなさい。(全て同じ記号を答えた場合は採点の対象としません。)

ア 地球が「共有地の悲劇」に見舞われることを防ぐためには、科学技術の力を活用すべきである。

イ 地球が「共有地の悲劇」に見舞われることを防ぐためには、自然科学の知識を活用すべきである。

ウ 人間がいまの状態を改めない限り「共有地の悲劇」は地球全体の近い未来の姿となるであろう。

エ イースター島の時代にも現代のような「科学技術」の力があれば「悲劇」は起こらなかったはずである。

問10 《Ⅰ文》の——「自然満足度」の論理と、《Ⅱ文》の——「共有地の悲劇」の論理とを関連つけた考察として最もふさわしいものを次から選びなさい。

ア 《Ⅰ文》は人間の文明史から予測できる人類滅亡への経緯を具体化したもので、《Ⅱ文》はその理由を一般化し時間軸に沿っておおまかに説明したものである。

イ 《Ⅰ文》は人類の文明がもたらす自然破壊の過程を論理化したもので、《Ⅱ文》はその文明の進行と自然破壊までの具体的な推移を述べたものである。

ウ 《Ⅰ文》は自然と人間の関係を述べたもので、《Ⅱ文》は人間と科学技術のあり方を説いた上で《Ⅰ文》と比較しその違いを明らかにしようとするものである。

エ 《Ⅰ文》は「豊かさ」という哲学的視点から人間の文明について考察したもので、《Ⅱ文》は「豊かさ」を獲得するための方法を歴史的事実に基づいて理論化したものである。

問11 《Ⅰ文》・《Ⅱ文》両文に共通して示されている、「人間の誤った考え」とはどのようなものですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 現在の環境に満足せず手を加えようとすること。

イ 人間に好影響を与えるものを最優先すること。

ウ 自然を無限の資源と決めつけること。

エ 科学技術の力を万能視すること。

三

次の(1)・(2)の各問いに答えなさい。

- (1) 次の①～④の上下左右の字と□の字を組み合わせて二字熟語ができるように□にあてはまる漢字を書きなさい。

① 担	命	② 実	説
□ 務		□ 習	
辞	公		
③ 複	木	④ 展	談
□ 踏		□ 唆	
混	指		

- (2) 次の①～③の各文の□に入る適切な語を、それぞれの語群から一つ選びなさい。

① この会の運営は□の方針に従って進めてください。

ア 既存 イ 既得 ウ 既製 エ 既定

② 出世することを後回しにしてでも、家族と過ごす時間を大切にするとともに、彼の□性が表れている。

ア 正当 イ 人間 ウ 合理 エ 国際

③ この機械を使用する際には十二分に□をしてから御使用下さい。

ア 操作 イ 点検 ウ 診断 エ 調節

四

次の――部の漢字には読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① お経を唱える。
- ② 強情をはるもんじゃない。
- ③ 養鶏場から卵を運び出す。
- ④ ヨッキュウ不満をかかえる。
- ⑤ 地震をヨチするのは難しい。
- ⑥ 参加することにイギがある。
- ⑦ 犯人はあの男だというカクシンを得ている。
- ⑧ 暴飲暴食はやめて、くれぐれもジチヨウするように。
- ⑨ 特別に取りハカろう。

中学国語解答用紙 1 - A

氏 名

得 点

得	点

0	1
---	---

⑥	①
	える
⑦	②
⑧	③

--	--

⑨	④	
らう		
		⑤
